

おやすみロバ



通巻3号 2008年8月

歯型

春休みの、ある日。

「しゅんくんの目はきれいだね。」

と言ったら、しゅんくんは、つま先立って
ツーステップし始めた。軽い体はもつと軽く
なつて蝶々みたいに舞い上がつてゐる。嬉しさ





「じゃあ、目だけじゃなくて、ゼーんぶでは、一番は誰？」

と言った。ゼーんぶって？ 全身、内側、行いも含めてか？ どういうことだ？ 「三人とも一番」なんて納得しないだろうな。私は頭を抱えて、うーんとうなった。しゅんくんが私の耳もとに来てコソコソ声で言った。

「ぼくって言うて。」

バカだな、しゅんくん。それはできないよ。他の二人がしゅんくんより劣ることになってしまふ。困った。しゅんくんのツーステップは一段と弾み、高く跳躍しながら、私と他の二人の周りをくるくる回っている。

しゅんくんはもう

「一番はしゅんくん」

が顔に出るのをおさえているように見えるけど、体全体から有頂天気分が溢れてる。こんなに喜ぶとは思ひもなかった。そんなつもりじゃなかった、言わなきゃよかった、と少し後悔した。しゅんくんは近くにいた同じ二年生のしょういちと、新入生のたつくんをかまえてきて

「この中で誰が一番、目がきれい？」

と私に訊いた。私は何と答えていいものか悩んだあげく、大人らしく

「たつくんは白目が真っ白できれいだし、しょういちの睫毛がまつすぐ下向いててすごくすてきな目だね。しゅんくんは黒目がきれい。」
と言ってやりすごそうとした。しゅんくんは更に、

と言われた気になつてる。勝ち誇った笑みで、「だけどさ、ほーんのちょおつとの差だからさ。君たちもがんばればよくみたいになれるよ。」

と言って二人を励ました。二人は

「えーつ、まだつるちゃん何も言ってないよ。」

「そーだよ。何言っちゃつての？ ぼくだよ。ね。」

「ぼくでしょ。」

三人のキラキラした瞳が私の答えを待ってる。しゅんくんは一番バカだけど三人ともバカだ、と思った。だんだんうんざりしてきて、一番がそんなに嬉しいのか、そしてなんでヒトの評価なんか気にするんだ、ハラが立ってきた。そこへ、土井ちゃん、年上の私と同じ

非常勤のスタッフが、通りかかって、
「顔が一番きれいなのはね、土井ちゃん。」
と自分で言った。私は、さすが、と思っ
て「心が一番きれいなのは私。」
とまねして逃げた。

春休みの学童保育は朝からだ。今朝、しゅんくんはいつものように元気にやって来た。でも両目は腫れぼったく顔全体がむくんでいる。昨晩たくさん泣いたんだと思った。

昨日、しゅんくんは新しく入った一年の子とつまらない言い争いをして、最後には思わず小石を投げてしまった。本人もまさか当たるとは思わなかったのだろうが、それが相手の子の後頭部に命中した。夕方、たんこぶの



できたその子の親御さんが迎えにみえたとき、職員がことの経緯を説明してお詫びした。親御さんは、子供が入っていきなり、しかも二年生にこんなことをされたのでおこつていた。保育の側の管理・指導の甘さを非難し、また、しゅんくんの親にもきちんと報告してほしいとおっしゃった。つまりそれは、しゅんくんの親がきちんと謝罪してくるよう、求めているのだ。

昨晩、しゅんくんのお母さんは菓子箱でも持って謝りに行ったかもしれない。しゅんくんもたつぷり叱られただろう。しゅんくんもお母さんはシングルマザーだ。ひとめ見ただけでは十代にみえる程、ぷっくりしてて、おしゃれでかわいい。でも二年生のしゅんく

んと妹の小さいりいちゃんをしつかり育てなくちやならない親だもの、叱っただろうな、かなり。しゅんくんは大好きなお母さんを悲しませ、おこらせるようなことをしてしまう自分にがっかりしただろう。つらくてしくしく泣き続けてたんじやないだろうか。たったひとり。

しゅんくんは、いつも、こうだ。たいして悪いことする子じゃない。ただ、ついカツとなった時、しでかすことはいつも最悪の結果を招くのだ。せいぜい威嚇するつもりで投げた小石が、狙ってもいない時にかぎって命中してしまう。しゅんくんは、やさしさもひと倍で愛情の豊かな子だ。だからこそ、その反対の感情も大きい。感情が防波堤をこえて



は私の膝に乗ってきた。甘えたいのかな。私はしゅんくんの好きな電車の話をしようとした。

「新しい中央線ってさあ、」

しゅんくんは全くのつてこない。膝の上にねころんでどこか遠くを見てる。大好きなりいちゃんのことをきいても、耳に入っていないようだ。別の話をしようとして

「こないださあ、」

と言ったとき、しゅんくんは黙って私の左腕の手首の少し上のところを噛んだ。

えっ、と思ったが、手をひっこめたり、しゅんくんを払いのける程、痛くはないし、「やめて」と言うにはしゅんくんは元気がないので噛ませておいた。そういえばこの前、もう

しまうと人は、ダメだと言われていることをダメだからこそやらずにいられなくなる。しゅんくんもバカだからどうしようもなくなるんだ。しゅんくんは心のきれいな子だ。だけどそれは私が親じゃないから言えるのかもしれない。

昼近くになった頃、むくみがひいてきて、いつもの表情になったしゅんくんを見て、しゅんくんの腫って黒いオリヴの実みたい。つやつやしてきれいだな、と思った。つい、口にしてしまった。

「しゅんくんの目はきれいだね。」

まだ無垢な、子供の、目だ。

夕方、帰り時間近くになって、しゅんくん

二年生になるのに、

「まだ一本もぬけてない」

と自慢気に笑っていた。全部、子供の歯なんだ。しゅんくんはだんだんと歯に力を入れてきた。彼の感情がここから入ってくる気がした。子供なんだけど、なんか切ない気持ちがあった。「いたいよ」と言おうかなという考えがよぎったとき、しゅんくんは私から離れた。小さな歯型がくつきりと残った。

(了)

エイヴァ



私たち子供部屋グループ（0才から三才）が、大沢公園に着くと、たいいてい大きい子たち（三才以上）のグループが先に来て、駆け回っている。缶蹴りや鬼ごっこやだるまさんがころんだをしたり、泥だらけになって何か作ってたり、木に登ったり。大沢公園はい

公園だ。右手にはサワラやケヤキやエノキの大きな木々、左手には桐の木が大きく枝を広げている。つつじの丸い茂みがいくつもいくつもポコポコとあり、金木犀のこんもりした深緑のかたまりも十から十五はある。大きなミズギ、エノキ、マテバシイ、イチヨウが

何本も続く向こうには、ハリエンジュの林。その中の一本は、まるで子供たちに登ってちようだいと、背中を差し出しているかのようになり、斜めになっている。ハリエンジュの緑はやさしい。クリーム色の花の房は、風にさらさら揺れて甘酸っぱい匂いであたりを満たす。落葉の時の黄色の葉は、真つ青な空の中をキラキラと降ってきて、夢みたい。その他に山吹やお茶の木、夏から秋にはカラスウリもある。何よりすばらしいのは、地面にたくさん草が生えていることだ。クローバー、ヘビイチゴ、イヌフグリ、ノビルにたんぽぽ、スズメノエンドウ、スズメノカタビラ。

でもまだ今は、イヌフグリとスマシレが咲き始めたばかり。風もまだ澄んで若くて木々も

まだ芽吹いてない。私はエイヴァの姿を探している。金色の髪、ぼっちゃりした後姿。でもこのごろグンと足が長くなってすらつとした。去年、子供部屋にいた頃はピンクが好きだった。今年買ってもらったアノラックは、瞳と同じ明るいブルーだ。とても似合っている。私は

「エイイバァー」

と歌うように呼んでみた。エイヴァのことを呼ぶ時はいつも、歌うように呼ぶ。アルペンホルンがやさしく山々にこだまするみたい

に。

「エイバァー」
もう一度呼ぶ。エイヴァはにつこり振り向く。ほっぺがバラ色で、恥ずかしそうに、まぶし

そうに笑う。私はたったそれだけで幸せなんだ。でも、呼んでみただけでは失礼だし、照れ隠しのためにも、とりあえず、何か探そう。そして、

「ほら」

と地面にパツチリ咲いた青い花を指さして、さも、そのために呼んだように取り繕う。エイヴァは嬉しそうに腰をかがめて、花に手を伸ばす。

どうしてエイヴァの名前を呼びたくなるんだろう。

エイヴァは食べることが大好きだ。食べる時のエイヴァはとても幸せそう。時にはハイテンションになりすぎて笑いが止まらな



くなるくらい。ある時は、おかずの枝豆をひと粒ひと粒取り出して、ごはんに混ぜて

「ビーンライス！」

と言つてにこにこしていた。そしてほとんど笑いながらスプーンで口に運び、味わって満足顔。私もその考えはすばらしいと思つたので真似してみた。色もきれいだし味もいい組み合わせだ。

エイヴァはそういう工夫をするけれど、とてもお行儀がいい。食べることをとても大切に思っているから。ままごとをする時だつてエイヴァは決していい加減じゃない。丁寧な料理を並べて、スプーンやフォーク、時にはそれが枝や棒でも、きっちり揃えて添えて。ゆっくり準備してから、

「いいよ。」

と言つて、ほほえむ。

「あつたかいよ。ブーン（スプーン）でまぜて。」
私はそつとスプーンで混ぜてゆつくり味わい、

「はあ」

と満足の息を吐く。エイヴァも満足そうに「おいしい？」

と笑っている。私は、きまじめで、まっすぐで、丁寧な、エイヴァが好き。

エイヴァが少しぼつちやりなのを母さんは心配して「おかわりはさせないで下さい。」とおっしゃった。だから、

「エイバ、おかわりはないのよ、これでおしまいね。」

と言わなくてはならなかった時、エイヴァは残念そうに考え込んでいた。そして、しばらくして、「わかった」という顔でしつかり頷いて、お皿に残っている分をひと口ひと口いとおしんで食べていた。幸せそうに。そして笑顔で

「ごちそうさま」

と言った。

エイヴァは、時には真つ赤になって泣く。たいした体力だなと感心するくらい大きな声

で泣き続け、人が何を言ってもどう慰めてもうにもこうにも泣きやまない。本人もどうにも出来ないんだ。泣くしかないんだ、きつと。うまくまぎらわせたり、切り替えたり出来ないで、もどかしいな。でもそういうところもエイヴァらしくて大好きだ。

私は「エイバ」と呼ぶだけで、とても幸せな気持ちになる。鳥たちや花々に祝福されているようなエイヴァ。

(了)



いま

「ヒーマー」

「ミーマー」

クレアが私を見てそう呼ぶ。クレアは私を誰か別の人と勘違いしてそう呼ぶのだと思った。

「ミマってだあれ？」

「フーイズヒーマ？」

尋ねると、私を指さして笑う。

ブランコに乗って、私を呼ぶ。

「ミーマー！おして！」

知らん顔すると

「ミーマー！」

と強く「ミ」にアクセントをおいて、プリッと怒って呼ぶ。

「私？」

「私、マヤちゃんよ。リピートアフターミー
『マヤちゃん』」

と私は、しっかりと説明した。クレアは、うん、わかった、という顔でにつこりして、

「イーマー」

と言った。

「マヤちゃん！よ」

何度言っても変わらない。おかしいな、と思
い続けていた。

しばらくして、イザベルがぐずり始めた。

イザベル（イズイー）は、我慢しない。気に入
らなけりゃ泣くし、「アップ」「アップ」と
必ずだつこだ。だつこしないと大変なことに

なる。顔を真っ赤にしてあばれ泣きするし、

それを越すと、今度は真っ青になつて痙攣を
起こすかもしれないので、だつこする。だつ

こすると、ちよつとでも用事でおそろそうとす
ると、強力なカニバサミで両足をギュッと締

めて、おりようとしな。それを見てクレア
も、何だかだつこされなくなつたのだろう。

クレアも「アップ」「アップ」と足もとにやつ
て来て、私を見上げている。

「いまねー、イズイーをだつこしてるから
ねー」

「アップ！」

「いま、ごめんね、出来ないの」

その時私は気がついた。何十回こんな事が

あつたのだろう。そのたび「いま、ごめんね」
「いまは抱っこできない」とクレアに我慢さ
せてきた。

英語では最初に主語がくるから、「いま」
が私の名前だとクレアはインプットしたの
だ。なんて可哀想な事したんだ、と思った。

クレアは、今も私を「イーマー！」と呼ぶ。

私も、もう仕方ないや、と「なーに！」と答
える。

「イーマ」「なーに」「いーま」と、につこり
しあうと、とっても楽しい。

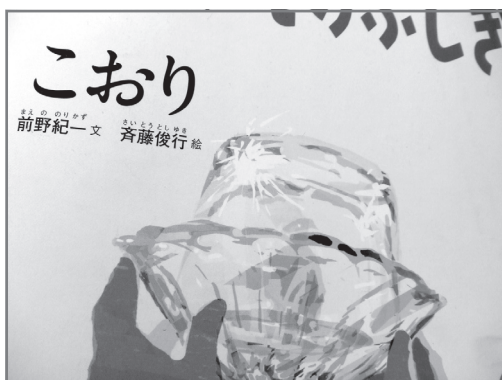
以前は私が怪訝な顔をしていたのでクレア
は自信なく「ヒーマ」「ミーマ」と言ってい
たけど、今は、はつきりと「イマ！」と呼ぶ。

(了)



工房水銀堂からのお知らせ

■ 絵本「こおり」福音館書店たくさんのふしぎ 8月号、
(文) 前野紀一、(絵) 斉藤俊行が7月1日に発売になりました。
お近くの書店でお求め頂けます。ぜひご覧下さい。



■ 「おやすみロバ」次号は10月1日発行予定です。



おやすみロバ通巻3号

2008年8月1日

著者 鶴峰まや子

挿絵 斉藤俊行

発行 工房水銀堂

水銀堂ホームページ <http://suigin.com>